

## 日常生活史——D氏の場合

「1900年から1933年までのブラウンシュヴァイクにおける  
労働者の日常生活」(その四)

宝 福 則 子

### はじめに

本稿は、『人文研究』第91輯，第97輯，第98輯に続く，「1900年から1933年までのブラウンシュヴァイクにおける労働者の日常生活」のインタビュー資料分析シリーズのひとつである。この資料の由来や分析方法等については，第91輯を参照されたい。

当該資料は，1980年3月31日に，D氏のブラウンシュヴァイクの自宅での3時間にわたるインタビューをA4タイプ用紙60ページに書き起こしたものである。

ここで，参考のため，まず，D氏の略歴と両親について簡単に記しておく。

1905年6月21日 ブラウンシュヴァイクで誕生

職業 塗装工，1923年～1925年まで遍歴旅職人，1929年マイスター資格試験，1931年より自営塗装業者

1919年～1925・25年まで塗装工同盟員

1931年6月13日（クリーニング業の）ローラー仕上げ女工と結婚

父 1873年または1874年にアイヒスフェルトのヴィンニゲローデで誕生  
1954年にブラウンシュヴァイクで死亡，職業はビール醸造職人，食糧・飲料労働者同盟員

母 1874年にブラウンシュヴァイクで誕生，1957年にブラウンシュヴァイクで死亡

職業はアイロンかけ女工、未組織労働者、2回の出産

## 1. 両親について

私の父は、1873年か78年生まれだったと思いますが、今、確かではありません。73年か74年だったかもしれません。笑ってしまうのですが、父の出身地である、アイヒスフェルト *Eichsfeld* のクードルフ *Kuhdorf* の教会局の書類によると、父は、同じ年の1月31日に洗礼を受けて、2月3日に生まれているのです。しかし、父によると、1月30日にアイヒスフェルトのヴィンニゲローデ *Winnigerode* で生まれ、2月に洗礼を受けたということです。いつ頃、父がブラウンシュヴァイクに出てきたのかは、分かりません。

父は、ビール醸造職人でしたが、ブラウンシュヴァイク以外で働いたことがあるかどうかは、分かりません。最後は、フェルトシュレスヒェン・ビール会社の工場 *Feldschlößchen Brauerei* で働いていました。その前は、ルードヴィヒ通り *Ludwigstraße* のレーヴェン・ビール会社の工場 *Löwenbrauerei* にいたのですが、この二つのビール会社が、1924年か25年に合併されたからです。フェルトシュレスヒェン・ビール工場は、以前はマダーメンヴェーク *Madamenweg* のシュトライトベルク *Streitberg* という名前でした。そして、これがレーヴェンビール会社と合併したのです。父は、この合併で失業したというわけでもありません。私が知ってるかぎりでは、彼は失業したことがないと思います。というのも、父は私たちにいつもマルツ・ビール(アルコール分の無い黒ビール：宝福注)を持って帰ってきましたから。そこで働いている者は、ただでビールを貰えたのですよ。昔は、そのビールは白い瓶に入っていて、家に持ち帰っても良かったのですが、今はもう、そういうことはありません。

父は、母との結婚以前に他の女の人と結婚していたこともありませんし、私生児をもうけたこともありません。父自身も正式の結婚で生まれています。

両親がいつ結婚したのか、また結婚前に婚約していたのかも知りません。それに、いつ、どのようにして、両親が知り合ったのかも知りません。

父は、政党に属していたことはありませんが、食糧・嗜好品労働組合の加入証のようなものは、貰っていましたから、おそらく労働組合には所属していたのでしょう。食糧・嗜好品（労働組合）*Nahrung und Genuß* です。

父は、その他には、政党にもスポーツ協会にも演劇協会にも入ってはいませんでした。彼は、政治的な関心はなかったので、政治的な活動はまったく何もしませんでした。父の出身地は、リュットイエ村ですが、父の家族はとても貧しくて、お金もなかったので、父たちは、子供の時から働かなければならなかったのだそうです。後に、ここブラウンシュヴァイクに出て来てからも、父は、どこのサークルや協会にも入りませんでした。

父は、1954年に、私の姉が亡くなったのと同じ年に、ブラウンシュヴァイクで亡くなりました。病気が原因でした。

母は、1874年5月20日にブラウンシュヴァイクで生まれました。彼女は生粋のブラウンシュヴァイク人です。母は、教会から脱退はしませんでした。教会のせいで、いつも大騒ぎでした。彼女は、教会から脱退することができなかつたのです。母から教会を取り上げることはできなかつたのですよ。彼女は、それほど頻繁に教会へ行つたわけではないのによ。それは、つまり、彼女は、いろいろな裕福な家でアイロン掛けの仕事をしていました。昔は、そういう仕事があつたのです。教会通いに熱心な女客がいて、その人たちのためにアイロン掛けをしていたわけですが、そのために脱退できなかつたのです。母は、私の誕生後もアイロン掛けの仕事をしていました。雇われていたというわけではなく、個人の家で「私の家で一日、アイロン掛けをしてもらえるかしら？」と頼まれると、その家に行つてアイロン掛けをするという種類の仕事でしたから、年金の掛け金を払う金などは、ありませんでした。仕事は、いつも他人の家に行つてしていました。

母は、国民小学校に通いました。仕事はブラウンシュヴァイクで、週に3日か4日働いただけで、それ以上は働きませんでした。二人の子供たちがまだ小さかつたということもありましたが、暇つぶしのようなものでした。母の仕事とはいつても、それは定職ではありませんでしたから、従つて、失業

ということもなかったのです。母は、何かの協会や労働組合にも加盟してはいませんでした。

母も、父との結婚前に結婚していたことはありません。母は、流産や死産をしたことはありませんでした。というか、私は、そのことについては知りません。母が私生児だったかどうかは知りませんが、多分、正式の結婚から生まれたのだと思います。そんなことについて、母に聞いたことはありませんでした。

母は、1957年に卒中の発作を起こし、その後に血栓症を併発し、病院で亡くなりました。父は、1954年に、彼女よりも先に亡くなっています。

## 2. 姉について

私には姉が一人おりました。この姉の他に兄弟姉妹はおりません。彼女はエルゼ *Else* という名前で、1900年12月6日にブラウンシュヴァイクで生まれ、1954年に、1年半ほどの入院生活の後に亡くなりました。

彼女は、1924年に結婚しました。彼女は結婚前は、ブラウンシュヴァイクで事務員として働いていましたが、結婚するまでだけのことです。結婚後は主婦でした。私の義兄、つまり姉の夫の誕生日は、1月2日でした。今はもう、はっきりと覚えてはいませんが、たしか1899年生まれでした。彼の職業は、活版印刷の植字工でした。彼は、後には機械植字工の仕事を習得しました。ベルリンで学校に行ったのです。姉は子供は一人も産みませんでした。私はこの姉とも良く理解し合っていました。

## 3. 祖父母と叔父について

### 祖父母

私は祖父母たちのうち、母方の祖母しか知りません。父方の祖父母と母方の祖父は知りません。彼らが何歳まで生きていたのかもわかりません。父方の祖父母は、アイヒスフェルト *Eichsfeld* で暮らしていました。母方の祖父母はブラウンシュヴァイクの出身で、ブラウンシュヴァイクで暮らしていまし

た。父方の祖父は、亜麻布織工だったそうですが、はっきりとは知りません。

たまたま知ったのですが、母方の祖父は、錠前師でした。母方の祖母は主婦でしたが、税関で掃除婦をしていました。父方の祖母は、農業に従事していました。

## 叔父

私には、叔父が一人いて、彼は「ナショナル」社 *National* の配達人でした。彼は2日間にわたって広大な地域を配達して回ったものです。一度、私も彼の馬車に乗って、配達に付いて回ったことがあります。そこで、私は村の中でわざと馬を左に引いてみました。馬は、全然、私に惑わされずに、ちゃんと右に引いていきました。そうして、店屋の前で停まると、店屋のおかみさんが出てきて、「ヘルマンおじさんや、もう私の所に着いたわよ。目を覚まさなくちゃあ」と言ったのですよ。

そうしたら、彼は馬から降りました。そこで、昔は棒状の氷がありました。その氷を空の水用の箱に入れて、ビールの荷降ろしをしました。それから、彼は宿屋に馬車を進めて、そこに泊まりました。翌日、ブラウンシュヴァイクに帰ってくる時、叔父さんが、馬には何も指示しないのに、馬は勝手に戻ってきました。彼はカール・シュミット通り *Karl-Schmidt-Straße* に住んでいて、そこにイーリンクス・ビール会社の工場 *Ihrings-Brauerei* がありました。現在、アイヒャー・コーヒーの焙煎工場 *Eicher Kaffeerösterei* があるところです。あそこはビール工場だったのですよ。そこで馬はまず、環状通りを下って、ハンブルガー通り、カール・シュミット通りへ行き、そこでグルッと半円を描きます。そうすると番地が1番の家の前、つまり、角で停まります。そこに彼が住んでいたのです。そうすると、叔母さんが上の階から下に降りてきます。馬の道具を降ろして、叔父さんと二人で馬に餌を与えます。それがすむと、まだ酔っぱらって眠っていて役に立たないので、叔父さんは、家に上がっていきます。叔母さんが財布を持って、御者台に坐り、その馬車でビール会社の工場まで操縦していくわけです。まったくの一人で工場の中

庭まで、何のためらいもなく、馬車を駆っていくのですよ

#### 4. 両親の住居とその界限

私は、両親がルードヴィヒ通り *Ludwigstraße* 29 番の住居に住んでいた時に、そこで生まれました。それから 1933 年に結婚するまで、旅の遍歴職人の時代の数年間以外は、ずっとそこに住んでいました。引っ越したことはありません。その両親の住居には、4 部屋ありました。

父は、昔、よく「一週間分の賃金が、1 カ月分の家賃だ」と言っていました。つまり、光熱費等も込みでしょうが、父は、住居のために一週間、働いたということです。

両親の住居の中に私たち家族用だけの廊下がありました。その他に、地下の部屋と屋根裏の物干し部屋もありました。トイレも住居の中になりました。風呂はありませんでした。1900 年頃、つまり、98 年、99 年、1900 年、1901 年に建てられた住居には、大体、どこも風呂は付いていませんでした。地下にトイレのある家も多かったものです。当時のフリードリヒ通り *Friedrichstraße* の家々では、トイレは地下にありました。マリーエン通り *Marienstraße* に建っていた家の人たちは、家の後ろ側にある中庭のトイレに行かなければならなかったのですよ。彼らは、冬にはいつも中庭を走っていったものです。

住居の中にトイレがあり、4 部屋の住居というのは、当時としては、設備が整った、快適な住居だったと言えるでしょう。今日では、「設備が整った快適な住居」には風呂がなくてはなりません。台所と素敵な廊下も住居の中になりました。物置や他の小部屋は住居の中にはありませんでした。この住居に 4 人で住んでいました。両親、姉と私の 4 人です。部屋の又貸しはしていませんでした。祖父母も一緒に住んではいませんでした。

ルードヴィヒ通りは、ビール工場の労働者やビール運搬馬車の御者、それに屠殺場の屠殺職人などが住人でした。それからゴミ収集馬車に乗っている労働者などでした。

それに缶詰工場で働く婦人達もたくさん住んでいました。缶詰工場が、カール・シュミット通りにありました。ミッテルヴェーク *Mittelweg* にもあり、それから、ミッテルヴェークから鉄道の線路を越えてすぐ右側にタウベン通り *Taubenstraße* がありますが、そこにも缶詰工場が二つありました。それにハンプルガー通りのシュマルバッハ缶詰工場 *Schmalbach* で、これで全部です。シュマルバッハ缶詰工場のとなりに、ユニオン社 *Union* のブリキ工場がありました。この工場も後にすべてシュマルバッハ社が、買い取ったのです。

ルードヴィヒ通りには、その他に、事務職の仕事をしている人々も、数人は住んでいました。でも、国家公務員は住んではいませんでした。教師のような職業の人も、全然、住んではいませんでした。公務員や教師は、どちらかという、ゲッティング通り *Göttingstraße* やポッケル通り *Pockelstraße* に住んでいました。ポッケル通りやツィンマー通りは、この地域でしたが、ここいら辺の通りに教師が多く住んでいました。それにハーネンリンク *Hanenring* にも教師が多かったのですが、当時のハーネンリンクは、今とは全く様子がちがいます。空襲のせいもありますが、ハーネンリンクは、当時は、ただの狭い、通り抜け道だったのです。

ハーネンリンク、アルテヴィークリンク *Altewiegring* を通り、フンボルト通り *Humboldtstraße* を越えたら、左側の先の道に入っていきます。そうすると。カール通り *Karlstraße* ですが、このカール通りに、問題の土地があるのですが、昔は、これの向かいにパン屋がありました。このパン屋は、カール通りの角地にあったのです。そこに小さな抜け道がありました。この抜け道は、ペンキ屋の小さな荷車がかろうじて通れるくらいの幅があるだけでした。この抜け道が、グリースマーローダー通りへの連絡道路になったのです。それが、今では、拡張されたハーネンリンクになったのです。そうでなければ、ブリューテンヴェーク *Blütenweg* からツィンマー通り *Zimmerstraße* へ抜けるか、軍隊の病院のあったランガー・カムプ *Langer Kamp* から回り道をしなければならなかったのです。この軍隊の病院は、今は、結核患者用の病院にありますが、その他の感染病患者もこの病院で治療を受けることに

なっています。

## 5. 学校生活

私の遊び友達みんなが、同じ学校へ行っていたというわけではありません。いろいろの子供が、私の通っていた、ペスタロッチ通りの学校へ行っていました。その学校では、授業料を払わなければならなかったのです。中級市民学校もいくらか授業料がかかりました。でも、「木靴カタカタ学校」は授業料がかかりませんでした。昔はそうだったのです。中級市民学校の後は、上級学校でしたが、費用は中級市民学校より、もっとたくさんかかりました。私たちの両親は、その費用は払えないので、私たちは行けませんでした。

学校では、時々、殴られることがありました。私たちの先生は、誰かが悪さをする、誰がやったかはお構いなしでした。もし、言うことときかないと、学校から「青い手紙」を貰いましたが、他には、説教されたり、教室の後ろに立たされるなどのお仕置きを受けたことはありません。私の学校は、全くの男子校でした。女子校では、お仕置きはなかったとよく聞きますが、私の妻は、女子校でしたが、手を前に出さされて、それを叩かれたり、おしゃべりをした時などは授業が終わった後、教室に残されて、笑い者にされたそうです。

学校が終わると、私たちは、よく、ほっつき歩いたものです。当時、週に2回は午後の授業がありました。つまり、朝7時に学校へ行き、1時に授業が終わりました。そして、午後の3時から4時か5時まで、体操か、絵や他の何かの授業を受けなければなりません。水泳もありました。週に2回でした。今は、子供達は土曜日は学校へ行かなくともよいけれど、当時は、週に6日間、学校がありました。

## 6. 子供時代の労働と遊び

子供時代に、お金を稼ぐために働いたことはありません。せいぜいが、リングの木からリングを盗んだくらいで、朝にパンの配達をしたこともありま



せん。だから、自由に遊ぶ時間は充分にありました。家事は、私の母がしていましたから、家の中の仕事を手伝ったこともありません。

近所の子供達で、家に庭がある子供は、庭仕事を手伝わなければなりませんでしたが、私の家には庭がありませんでしたから、庭仕事を手伝うということもありませんでした。父は、特に庭が好きだったというわけではなかったのです。仕事場で終業時間になったら、彼にとって、それが終業時間なのです。もう、それ以上に働くつもりはなかったのです。終業になると、街へ出て、私たちに蠟細工か浮き出し細工か何かのおみやげを買って帰ってくるのです。もう彼の余暇の時間ということです。

当時、同じ年頃の他の子供達よりも私の方が自由に遊ぶ時間が特に多かった、ということはないと思います。みんな同じくらい遊ぶ時間はあったけれども、私はパンを外に持って出て、食べることは許されませんでした。いろんな子供がいましたが、外から家にいる母親に向かって、「お母さん、下にパンを放り投げてちょうだいよ。お腹がへったんだ」と叫び、家の中の母親からパンを貰うのですが、私達は家に戻らなければなりませんでした。その子供達は、外でパンを食べて、そのまま遊び続けるのです。私たちは、他の子供達と同じように、外で食べることは許されませんでした。つまり、私たちのパンの上にジャムしかのっていないとか、厚いソーセージがのっているなどということ、他人が見ないようにということでした。当時、この界限には子沢山の家族がたくさん住んでいました。当然、子沢山の家族は、1人か2人の子供しかいない家族のような暮らしはできません。昔は、そんなにたくさんのお金を稼ぐことはできなかつたのですから。

子供の時の遊び場所は、家の向かいにある畑でした。アスパラガス畑の畝と畝の間を遊び場にしていました。子供時代は、割れ物を投げて割ったり、包囲戦ごっこや、「持つ」‘*Hat ikn*’という遊びをしました。この「持つ」という遊びは、ボールを持っている子が、そのボールを投げます。私がボールを投げたとします。そこに4人の子供がいます。そうすると、今度は誰がそのボールを持つのか、という意味で「持つ」という名前と呼んでいたのです。

そのボールをキャッチした子供が、今度はこちらへ来て、またそのボールを投げるといふ遊びでした。それに「かくれんぼ」もしました。

お祭りの市があると、私たちは、50ペニツヒもらったものです。そのお金で、ナッツのお菓子を買って、家に持って帰らなければなりません。でも、いつも銅貨1枚で買える、小袋入りのものを買いました。その残りのお金を、私たちは、メリーゴーランドに乗ったり、ボール当てをしたり、何かの遊びに使いました。お金がなくなると、メリーゴーランドを押したものです。当時、まだ馬は使っていなかったので、人力で回していたのです。私たちは、下でグルッとひと回り分を押すと、4回、只で乗せてもらえたのです。そして、並んで、2回分のオルガン回しを手伝うと、10回、メリーゴーランドに乗せてもらえました。手伝った分は、すぐに乗せてもらわなくても、翌日に乗せてもらうこともできました。私たちは、ルードヴィツヒ通りに住んでいましたから、祭りのある広場まで、ひとつ飛びでした。

私が子供時代に遊んだ仲間は、私の年頃の男の子の乱暴者ばかりでした。昔は、男の子は、女の子とは遊ばずに、男の子とばかり遊んでいたものです。私の妻は、男の子とも遊んでいたと言いますが、彼女自身が男みたいですから。私の妻は、モルゲンラント *Morgenland* 出身です。昔、ヌスベルク通り *Nußbergstraße*、マリーエン通り *Marienstraße*、コメニウス通り *Comeniusstraße* 等のヌスベルク界限をモルゲンラントと呼んでいたのですが、彼女は、ここで生まれ育ったからですよ（この界限は、柄の悪い地域とされていた：宝福）。

## 7. 職業

私は、塗装工の見習いとして、ブラウンシュヴァイクで職業生活を始めました。塗装業のマイスターの資格を持つクラッツェンシュタイン *Kratzenstein* 親方の元で修業を始めましたが、ずっと彼のところで働いたわけではありません。その後、1925年まで2年半ほど遍歴職人としての旅に出たのです。北のハンブルクにまでも行きましたが、どこでも短期間の客分として働いた

のです。当時、遍歴修業をしなければならなかったというわけではありませんでした。でも、私は遍歴修業をしてみたかったのです。私たちは4人一緒でした。いわば、家出をしたのですよ。その内の一人は、その後アルゼンチンにまで行ってしまいました。彼は、その後、私もアルゼンチンに来るよという手紙を書いてきました。しかし、私の母が病気で、しかも、姉が結婚してしまったために、その目論見はそのままになってしまったのです。その後、私たちの連絡は途絶えてしまいました。

1925年から29年の間は、塗装職人として働いていました。でも、1929年までは、いろいろな会社で働いていました。ある会社で3年間も続けて働きましたが、その他では、6週間だったり、8週間だったり、いつも短期間しか同じところでは働いていませんでした。時期にもよりましたし、私にとって、もう快適ではないと思ったら、また旅に出してしまうのです。当時は、塗装工同盟から1マルクの旅遍歴用支援金が出ていたのです。昔は、まだそういったいろいろなものがありました。

そして、私は1929年にマイスター試験を受けたのです。その時、私はまだ24歳にもなっていない若造でしたよ。マイスター試験は、1929年から30年にかけてでした。そして、塗装マイスターとして31年から独立したのです。義理の父も塗装マイスターだったので、29年から31年の間は、彼のもとで働きました。そして、1970年に職業生活を終わりました。

失業していた期間というのは、3、4日間、仕事がないということはありませんでしたが、実際には失業したことはないと言えます。その3、4日間というのも、冬期のクリスマスの頃の、ちょうど端境期のことでした。1カ月とか長期にわたって失業したということは、まったくありません。

昔は、工場で働くにしても、ゆったりと静かに仕事ことができました。しかし、今では、仕事といえば、せわしないものです。例えば、昔、私が部屋の壁紙を張り替える仕事をしていた時などは、じゅうぶん、時間をかけることができました。その他にも、昔は、壁紙も今の物よりも厚かったものです。私た

ちは、昔は、出来合いの糊は、まだ使っていませんでした。糊を作るために、ライ麦粉を買い、ライ麦粉を煮て、糊を作らなければならなかったのです。今いる、この部屋くらいの大きさの部屋の壁紙を張るのに、私は一日いっぱいかけて、糊作りをしたものです。しかし、今、私が同じ仕事をするとしたら、親方としては、少なくとも、すべての壁紙張りを一日で終わらせなければなりません。そうでなければ、儲けることができませんから。昔は、1巻きの壁紙を50ペニツヒで張ったものです。しかし、今は、1平方メートル単位で張ります。そして、みんな自分の部屋の壁紙を上手に自分で張り替えたりします。

## 8. 両親との親子関係

私は、両親のどちらとも同じ程度に良く理解しあっていました。どちらの方が良かったと差をつけることはできません。私は、とても良い家庭で育ちました。両親は愛情あふれた育て方をしてくれました。もちろん、悪戯をした時には、少しばかりお尻を叩かれましたが、そんなことはどこの家でも行われていたことです。だから、両親について、文句など言えません。

姉と喧嘩をしたことはありませんでした。何か悪いことをした時は、1回目は許してもらえましたが、2回目にはお尻をひっぱたかれることになっていました。それでも、一度も叩かれたことはありませんでした。一度、1階の窓ガラスを壊した事があります。その時、父は「今度、窓ガラスを壊したら、尻をひっぱたくからな」と言いましたが、その2、3週間後に、またもう一度、3階の窓ガラスを壊しました。でも1階の窓ガラスではなかったから、殴られずにすみしました。3回目にガラスを壊すこともなかったので、ガラスのせいで、父にお尻を叩かれることはありませんでした。

私の妻は、布団たたきで叩かれたことがあるということですが、私は、布団たたきなどで叩かれたことはありませんでした。私の妻は、親にずいぶん叩かれたということですが、私たちきょうだいは、いずれにせよ、叩かれたり殴られたりしたことは、ほとんどありませんでした。私たちは、こぎれい

な地域に住んでもいましたし、おとなしかったのです。私が最後に殴られたのは、12歳の頃だったと思います。

私の妻の母親は、その時にちょうど手に持っている物、たとえばブラシなどで叩いたということです。彼女の父親は、あまり叩いたり殴ったりしなかったということですが、もし、殴るとしたら、妻だったそうです。もし、殴られたら、2週間は坐ることもできないくらいに、手ひどかったらしいです。妻は、16、7歳になるまで殴られたそうです。つまり、彼女が、10時門限を守らずに帰宅した時など、5分遅れても、「お前は5分遅れて帰ってきたから、一発、お見舞いだ」と言って、殴られたそうです。妻の家の近くの市の公園では、彼女が15歳の頃、いつも軍隊のコンサートがあって、軍楽隊の隊長が素敵で、女の子たちが夢中になったのだそうです。そのコンサートが、10時半まで続いたということです。

私の両親は、子供達のいる前では、お金のことについて、話したことはありません。私たちは、お小遣いをもらいました。そして、私や母が、父に「お父さん、少しお金がいらいます」とか、「子供の何と何を買わなくちゃあ……」とか言って、父からお金を貰うと、「さあ、町へ買い物に行くわよ」という具合でした。父と母がお金のことで、何やら機嫌悪そうにしているのに気づいた時は、私たちは、「僕たちは外に行くよ」と言って、さっさと外に出ました。当時、私たちは、まだ小さくて、そんなことを両親と話すほどにかしこくなかったのです。

その後、成長してからは、私は、いつも外に出ていて、家にはほとんどいませんでした。朝早くに家を出て、仕事場に行き、4時か5時に仕事が終わると、家でちょっと何かを食べて、ふたたび外出しました。それから、12時か1時半に帰ってきたものです。私たちは、1階に住んでいましたが、家の前に戻ると、家の鍵で家の外壁を叩くのです。そうすると、母が出てきて、ドアを開けてくれたものです。昔は、竈がありましたが、母はコーヒーが好きだったので、「喉が乾いているかい？ コーヒーを飲もうか？」「ハルマ(ダイヤモンドゲーム風の盤上ゲーム)を1ゲームしようか？」と聞いたもので

す。彼女は、私とハルマ・ゲームをするのが、好きでした。

父は、そういう遊びには向いていませんでした。そうやって、帰宅後にハルマ・ゲームを1回戦して終わると、もう3時半になっていました。そんなに遅くまで起きていても、朝、私が母にを起こされたのは、たったの1回だけでした。「お若い人、起きるつもりがあるの？ 仕事に行かなくちゃあならないのだから、もう起きなくてはいけないよ！」と母が言って、一度だけ、起こされました。もし、そのまま寝ていたら、それで終わりでした。私も、同じように、私の子供達を1度だけ起こしたことがあります。

私は、子供の時に、両親と自分の抱えている問題について話したりすることはありませんでした。両親から男女の性について、説明を受けたこともありませんでした。私たちは、自分で学んだのです。つまり、誰かが話しているのを盗み聞きして、覚えたということです。

政治については、両親の家で話し合った事は、まったくありませんでした。

## 9. 結婚

私は、1931年6月13日にブラウンシュヴァイクで結婚しました。私と妻は、「家と郷土」と題した、ある展覧会で、私が20歳で、妻が18歳の時に知り合いました。彼女は、その展覧会の会場の隅っこに立っていたのです。そこで私は、すぐに彼女に話しかけました。そして、次の日にまた、そこへ行きました。彼女は、まだというか、もう、そこに立っていました。そんな風にして、知り合ったというわけです。私はその時、彼女に近づいて、「すみませんが……」とか何とか言ってみて、話をするきっかけを作ったのです。

幸福なことに、まだ妻と結婚しています。私にとっては、この結婚が最初で最後の一回きりの結婚です。妻は、ヒルデ *Hilde* という名前で、1908年6月22日にブラウンシュヴァイクで生まれ、そして育ちました。彼女の誕生日は、ちょうど私と1日ちがいです。彼女の結婚前の名前はオールロッグ *Ohlrogge* です。私たちは、教会で結婚式を挙げています。新教です。私の妻は、結婚した時、まだ新教の教会に所属していました。それで彼女が教会での結

婚式を望んだのです。彼女は、今もまだ、教会に所属しています。

妻は、結婚前、クリーニング店でローラー仕上げの仕事をしていましたが、結婚後も仕事を続けました。彼女は、1950年頃まで仕事を続けていました。彼女の父親はも塗装マイスターで、母親は専業主婦でした。妻は、結婚前はヌスベルク通り *Nußbergstraße* 32番の両親の家に住んでいました。公園に近いほうです。

私たちは、1928年に婚約し、31年に結婚したのですから、結婚前の婚約期間が3年か4年もありました。というのも、私はまずマイスター試験を受け、その後、独立したりといろいろと大変だったからです。つまり、結婚前に自分の生活基盤を作りたかったというわけです。私たちは、もう婚約する数年前にいい仲になっていたのです。婚約については、突然、決まりました。妻との婚約以前に他の女の人と婚約したことはありません。当時、婚約などということは、簡単にするものではありませんでした。一般的に、大変、真面目に考えられたものです。

私たちには、2人の子供がいましたが、一人が亡くなり、今は、息子が一人だけです。上の子のホルスト *Horst* は、1937年2月21日にブラウンシュヴァイクで生まれました。下の子は、亡くなりましたが、1941年にブラウンシュヴァイクで生まれました。この亡くなった下の子は、塗装工でした。若くして亡くなったので、マイスターにはなれませんでした。上の息子は、電気通信技術者です。彼は、まだこの仕事をしています。警報装置や電話などの関係の仕事ですが、どこか民間の会社で働いています。

## 10. 性・避妊

私の両親は、多分、たくさんの子供は欲しくなかったのでしょうか。子供は姉と私のふたりだけでした。お金がなかったのですから。父は、昔、よく「一週間分の賃金が、1カ月分の家賃だ」と言っていました。つまり、光熱費等も込みでしょうが、父は、住居のために一週間、働いたということです。私にとっても、もし、まだ私が働いているとして、一週間分の賃金が家賃とい

うことになりますよ。1カ月分の賃金の4分の1が家賃ということです。

私の両親が意識的に子供を2人しか作らなかつたのかどうかは、分かりません。私は、両親にそんなことを尋ねたこともありませんでしたし、何も聞いていません。昔は、避妊具や避妊薬が、今のように大量に一般的に出回ってはいませんでした。

まだ当時は、みんな慎ましくて、性的な行為をしたり、話したりするのは、少し恥ずかしいものと思っていました。今のように、あからさまではありませんでしたとも。私たちだけでなく、他の若者たちも、キスをするだけだって、誰からも見えないような隅っこへ行ったものです。私たちの時代には、今の若者たちのように、人前で大ぴらに抱き合つて、キスをするなどということはなかつたのです。1, 2年前のことですが、道を歩いている私の前で、学校の生徒同士が、激しくキスし合っていました。15歳くらいの子供たちでした。だから、私は「君たち、家に着くまで待てないの?」と言ってやりましたよ。そうしたら、その女の子が何と言ったと思いますか? 「おじいちゃん、うらやましいの? あんたにも、キスをしてあげようか」と言ったのですよ。そんな生意気なことは、昔じゃあ許されないことでした。昔、私たちは、『ホーフィューガー』で自転車協会か何かのダンス・パーティなどがあつた時など、向い側の市民公園へ行き、そこでだれからも見えない死角になっている、太い木の幹の後ろ側に回つて、誰もそこに立っていないかどうか、辺りを見回したものです。それを確かめてからはじめてキスをしたものです。今じゃあ、そんなことをする若者なんて、もういません。

昔、1920年代にも、避妊具はありました。私が避妊具について知つたのが、何時、どのようにして知つたのかは、はっきりと覚えていません。友達同士で一緒に集まつて、そのことについてお互いに知っていることを話し合つたということだったのでしょ。そうでもなければ、普通、そのようなことは、知ることはできませんでした。何歳の時に、知つたかも覚えていません。もちろん、もう結婚前には知っていました。

当時、私たちが結婚した頃は、結婚前は、お互いに男女の性関係を持ちま



せんでした。ほとんどの人達は、結婚するまでは待ちました。もちろん、結婚式の前に性関係を持って、結婚式の直前に子供を生んだ人もいますけれども、ほんのわずかの人々だけでした。いずれにせよ、私たちは、結婚前は性関係を持ちませんでした。私たちは、賢こすぎたのです。道徳観から婚前の性関係をもたなかったのだ、というわけではありません。

当時、私の周りの人たちの間で起こった、妊娠中絶についての話などは、聞いたことはありません。多分、妊娠中絶はあったのでしょうか、聞いたことがなかったというだけのことでしょう。注意を払っていたわけでもありませんし。

## 11. 宗教・政党・労働組合

### 〈宗教〉

父は生まれた時は、カトリックだったのですが、母が新教だったので、改宗したということです。その後、私よりも早い時期に新教の教会から脱退しました。多分 29 年から 30 年にかけての頃だったと思います。

私は 1919 年に堅信礼を受けています。私の姉も同様に堅信礼を受けています。青年式 *Jugendweihe* はしていません。私が教会を脱退したのは、単に若者として、教会への献金を払いたくなかったからでした。牧師も、金が欲しかったら、働くべきなのですよ。今もまだ、教会税は、月給から引かれます。独身者だと、既婚者よりも、教会税を多く払わなければなりません。私の亡くなった息子も、脱退するつもりでした。生きていたなら、脱退していたことでしょう。彼は、いつも腹を立てていましたから。

### 〈労働組合・政党〉

自営業になる前は、塗装工同盟 *Maler-Lackiererverband* に加盟していました。これは、後に今の金属産業別労働組合 *IG-Metall* になりました。塗装工同盟には、見習い工の時、14 歳か 15 歳の時に加盟しました。1919 年から 28 年か、25 年、あるいは 26 年まで加盟していました。私も少しばかり狂っていたもので、独立して自営業者になるつもりだったために、脱退したのです。

塗装工同盟に加盟した理由は、先輩の職人達がみな加盟していたからです。それに、見習い仕事につくやいなやすぐに、活動家で、半ば従業員代表のような役をしていた、私を指導してくれる立場にあった先輩の職人が、私に「お前も同盟に入らなければいけない」と言ったのです。当時、女性の同僚はまだいませんでした。塗装工同盟では、役職にはついていませんでした。

20年代には、私は政党に属してはいませんでした。だから、SPDにも入党していませんでした。私は、労働者前線 *Arbeiterfront* に入っただけで、そこではちっぽけなポストを占めていました。副会計係でしたが、それ以上ではありませんでした。

私は、新聞は『ブラウンシュヴァイガリッシェン・ナッハリヒテン』*Braunschweigerischen Nachrichten* を購読していましたが、私の義兄が、シュタインヴェーク *Steinweg* とリッターブルンネン *Ritterbrunnen* の角にあった『ノイエステ・ナッハリヒテン』*Neueste Nachrichten* を只で貰えたために、私の所にそれを持ってきてくれました。それで、時々、それも読んでいました。『フォルクスフロイント』*Volksfreund* は、家では読んでいませんでした。私たちは、後に結婚してすぐに、『フォルクスフロイント』を購読し始めました。

当時、私がどんな人物を評価していたかは、もう記憶にありません。しかし、子供の時に、公爵が入城してきた時に、私たちはその入城の様子を見に行きました。私たちは、ハーゲンマルクト *Hagenmarkt* の人垣の中に立っていました。私たちは、子供同士で、いつも「あれは、とっても美男子でスマートな男だ」とか「あれは、有能な男に見える。彼らは、僕たちの気に入るだろう」などと言っていたものです。そういう意味では、公爵を評価していたのですが、その他の人物については、もう覚えていません。職場でも特に評価していた人物はいませんでした。工場長は美男子だなどといった意味でも評価していた人物はいませんでした。

1930年以前に、私が属していた社会は、中産階級だったといえます。なぜかという、私は労働者の中にいると気持ちが良いのです。つまり、そこに属しているという気持ちになるのです。けれども、私自身が下の労働者の社会に属しているのだと思ってはいても、同時に上の方の5,000人に属しているのだという気持ちにもなれるからです。この他に10,000人の新興成金の層がありますが、私自身はこの層にはまったく関係ないと思っています。これらの3つの層の内の中間で私は心地よく感じるのです。だから、中産階級という言葉を使ったわけです。つまり、労働者でも、ある程度、自分の職業を理解していれば、中産階級と通じ合うことができます。違う言い方でそれを表現するとしたら、つまり、中産階級に順応することができるということです。

## 12. 祝い事・余暇

私の家族は、いつも各々の誕生日のお祝いをしました。誕生日は、とても素敵に祝ったものです。クリスマスのお祝いもしました。復活祭のお祝いもしました。復活祭は、それほど重要なお祭りではなかったけれど、復活祭用の卵がありました。5月祭には、いつも馬とビールを乗せた車で森に行ったものです。ちょうど、第1次世界大戦の前です。馬と車で行ったのです。2匹の馬が車の後ろからついていきました。5月の第1日曜日に森に出かけたのです。5月祭を祝うためにです。5月1日のメーデーではありません。いずれにせよ、日曜日でした。この祭りは、労働組合によって催されたものでしたが、たぶん社民党 SPD も主催団体に入っていたのでしょう。そのお祭りには、家族のだれかが行かねばならないのだ、ということはありませんでした。だれでも参加したい者が行ったのです。子供も、私たち若者もです。その他の労働組合のお祭りや政党のお祭りは重要ではありませんでした。

大晦日 *Silvester* も、いつも祝いました。カーニバルの祭りも祝いましたが、当時は、今のように大がかりではありませんでした。やはり仮装はしていましたが、今のような仮装衣装ではありません。私の子供時代で一番すてきなお祭りは、どれも、とてもすてきだったので、優劣をつけることはでき

ません。誕生日だろうとクリスマスだろうと、またはダンスを楽しむのだろうと、何かのスポーツ協会や森番をする射撃クラブや自転車愛好家協会だろうと、どれも同じくらい素敵でした。

ある時、大晦日の、妻の両親の家での宴会から家に帰る途中のことですが、二人の友人に出会いました。彼らは、「森番の射撃クラブ」のクラブハウスに行くところでした。サッカーボール・クラブの何かがあったのです。「君も行くか？」と私も誘われましたが、その時、私は、手にバケツ一杯のパンチを持っていたので、「この飲み物を家に置いてから行くよ」と言って、後から行きましたが、1時半でした。それから朝の6時まで「森番の射撃クラブ」でお祭りをしていました。

その当時、よく付き合っていた夫婦がいて、その夫婦と私の妻の誕生日が近かったので — 奥さんの誕生日の翌日が私の妻の誕生日でしたが — 3人の誕生日を一緒に祝いました。

戦争前は、スポーツ協会などにも関心がなかったので、加盟していませんでした。なぜかという、夜、私は工芸学校に通っていたので、夕方から学校が始まるのです。日曜日、朝の6時から10時、12時まで学校がありました。私は独立するつもりだったので、マイスター資格を取るつもりでした。だから、学校へ行ったのです。とにかく、私は演劇グループや青少年グループや、他の教会などの会などのどれにも所属してはいませんでした。

私の妻と知り合った時は、ダンスに行くということはありませんでした。ダンスは好きではありませんでしたから、つい、一杯飲みに行く方に向いてしまったのです。私の両親は、遊びとっては何もしませんでした。私たちが家に帰ってくるのを待っていただけです。両親には、余暇はありましたが、居酒屋に行くことはありませんでした。父は、家にたくさんのビールがあったので、祝い事をする時でも、私たちは全然ビールを買わなくてもよかったです。余暇にやったことといえば、日曜日に、ちょっとヌスベルクへ行ったり、あるいはシュッツェン広場 *Schützenplatz* の年の市に行くくらいで、他には何もしませんでした。

ヌスベルクの素敵なレストランの「クヴェルマー・ヴァルト」*Querumer Wald*には、両親とよく行きました。子供たちは、両親の前を歩きました。悪戯をしたら、両親は後ろから見るができますから。途中、顔見知りの他の家族に出会い、そういう時には、レストランでは、両親はいつも彼らと同じテーブルに座りました。そういう時は、持参した物をいっしょに使いました。昔は、ヌスベルクでは、コーヒー豆を持参し、家族用に自分でコーヒーを淹れることができたのです。『古い習慣はなくなっています。ここで家族はコーヒーを淹れることができます』と書かれた看板があったものです。つまり、自分たちの人数分に合わせたコーヒーポットをそこで探します。2リッター、3リッター、または4リッター入りのポットを探して、コーヒーの粉をその中に入れると、熱いお湯を入れてくれるというわけです。当時、ポットに一杯お湯を入れてもらって、硬貨1枚分か15ペニヒでした。ケーキは、持参しなければなりません。ケーキは、そこで買うことはできましたが、買うと高かったので、母が自分で焼いたのです。そこに集まる人々は、みんな労働者でした。その他には、銀行の頭取などはいませんでした。中流のホワイトカラーの職業の人々もいました。全部が労働者というわけではありませんが、80パーセントは、労働者でした。安かったからです。労働者はお金がなかったのですから。他の人たちも、同じようにしていました。ピクニックに行くレストランとは、ここの『ホーフイェーガー』や、市民公園の『ホルツガルテン』などでした。それに同じ市民公園のヴォルフエンビュッテル寄りの給水塔の所にある『パークハウス』などもありましたが、ここには広い芝生があって、夏になると、子供達はここで寝転がって昼寝をしていたものです。オーカー川は、当時はまだきれいでした。だから、2、3カ所の水浴び場がありました。でも、女性用と男性用が分かれていたので、私たち子供は、隙間からのぞいたものです。みんな悪ガキでしたから。当時は、まだトップレスで水浴びをする婦人はいませんでした。

市民公園の『パークハウス』は、とてもとても素敵でした。『オルパーの水車小屋』*Ölper Mühle*も素敵なレストランでした。ピクニックの場所は、両

親がその時に行きたい所へ行くということで決まりました。母が、まだ家事の仕事を終えていない時などは、父が私たちを連れて近場へ行ったものです。父は、家事を手伝ったりはしませんでした。ほとんど毎日曜日に、このようなピクニックにでかけましたが、後に、私は小学校の1年生の時に自転車を買ってもらいました。復活祭に、この自転車をもらったのです。最初のサイクリングには、今ノカントホーフ学校 *Kanthofschule* のある、練兵場に行きましたが、そこでカーブを切れずに、ビール運搬馬車の車と馬の間に突っ込んで止まりました。私が6歳の時でしたが、ハンドルにかろうじて手が届くくらいでした。ビール運搬馬車の御者は、私が突っ込んでくると思ったので、停まったのです。だから、他の車は通っていませんでしたし、何の怪我もせずすみしました。

この練兵場は、冬になると、水をかけて、凍らせました。そして、私たちのスケート場になったのです。このスケート場のシーズン券は、25ペニツヒでした。25ペニツヒじゃあ、今ではガムひとつ買えませんよ。それから鉄橋前の小公園の池もスケート場になりました。ここは40ペニツヒでした。その木のバラック小屋の中には大きなストーブが2つありました。そこで暖をとることができたのです。コーヒーや水が、一杯5ペニツヒでした。

私の両親が、日頃付き合っていたのは、ほとんどが親戚でした。母と父の両方の親戚です。両親は、お金がありませんでしたから、飲み屋や居酒屋などへは出入りしていませんでした。

でも、私自身は、よく居酒屋へ出入りしていました。特定のひいきの居酒屋だけということではなくて、どんな小さな居酒屋でも、どこへでも行きました。当時、『シュタット・ヘルムシュテット』*Stadt Helmstedt* という居酒屋がありましたが、ここへ私も出入りはしましたが、常連としてはありません。この居酒屋は、共産党員の飲み屋でしたが、別にそれが厭だというわけではありませんでした。でも、ここには、1度か2度行っただけです。その他には、『自由』*Freiheit* や『煙取り』*Rauchfang* や『プブリツツェ』*Pubritze*

などという名前の飲み屋がありました。シュタット・ヘルムシュテット以外には、共産党員の飲み屋ではありません。一番大きな共産党員の飲み屋は、もう名前は忘れてしまいましたが、高台にあった飲み屋です。日曜日か月曜日の朝の2時頃、乳母車を引いて、この飲み屋に入っていました。私たち夫婦ともう一組の友人夫婦と一緒に。彼らには、たぶん1歳か1歳半くらいになる娘がいました。この飲み屋へ行く途中、歳とったお婆さんに出会ったのですが、彼女が私に、こんな夜中に乳母車を引いて歩いていて、恥づかしくないのか、と聞いてきました。私は、「もし、恥づかしいと感じたら、乳母車を引いて歩きはしません」と答えたものです。そして、私たちは飲み屋の中に入りましたが、中は共産党員でいっぱいでした。でも、だからというって共産党員が私たちに厭がらせをしたということはありません。当時は、社民党員だろうが、共産党員だろうが、どちらでも良くて、そんなことは、かまわなかったのです。

つまり、彼らがお互いに殴り合いをすとしたら、社民党員か共産党員かどちらかの誰かが、その前にビールを飲んで酔っぱらった挙げ句に、からんで、いざこざを起し始めたというだけのことでした。相手を非難したりして、領分を侵し、殴り合いが始まるという風でした。ほとんどは、そういう形での喧嘩でしたよ。政治的に深刻なものではなくて、相手を馬鹿にした態度が原因で始まる喧嘩がほとんどでしたから、ばかげた喧嘩だったのです。私は、この近くの、今、建物が壊された場所にある、『フィアヤーレスツァイテン』 *Vierjahreszeiten* に42年間、通い続けました。だから、私は、この飲み屋の歴代の主人をみな、知っています。

私はいつも4人か5人の仲間と一緒に行動していて、土曜日には、いつも外に出て、あちらへ、こちらへと行ったものです。そうして楽しい夜を過ごしたのです。そして日曜日の朝には、午前の軽い酒の飲み会をしました。父もその場に招待した時などは、父が「1時には食事だけど、もう12時半だ。家に帰らなければ」と言うのにたいし、私は「ああ、まだ、帰るには早すぎ

るよ」と言います。父は家に帰り、私は、翌日の朝3時頃に、やっと、家に帰るのです。それどころか、月曜日の仕事が終わった後に帰ったこともさへもあります。母は、そんなこともあるのを知っていましたから、心配しませんでした。昔は、労働者は1週間分の賃金を持って、居酒屋に行くこともできたのです。そんなことをしても、彼らが100マルク紙幣を使ったのかとか、500マルク紙幣を出したのかなんてことを、誰も見たりしませんでした。